

膏取り一揆と託宣

橋 弘 文

1

木造2階建ての西洋建築の病院が、明治2年(1869)に高知の五台山の吸江に建設された。この吸江病院では西洋人の医師が患者を診察し、病室には鉄製のベッドが備えつけられていた。やがて一つのうわさが吸江病院をめぐる発生する。異人(西洋人医師)が灸をする鉄製の装置に日本人の患者を寝かせている。これは治療のためではない。異人は鉄灸で患者の身体から膏を取り、患者は笑いながら鉄灸の上で死んでゆく¹⁾。

このうわさは明治4年(1871)には高知県北部の山間部にも伝わった。うわさは、戸籍法の発布と徴兵令の準備のためにおこなわれていた男子の調査と結びつけられる。政府は徴兵令の準備とついでに異人に売り渡す日本人の順番の調査をしている。徴兵令は政府が異人に日本人を差し出す制度にちがいない。異人に売り渡された日本人は膏を取られて死に、異人はその膏を滋養のために飲むという。うわさを信じた人びとは、日本人の生命を守るためには徴兵令に反対しなければならないと憤った。人びとの憤りは暴力による反対行動を誘発しかけていた。

高知藩はこのような事態にたいして、新しく設けた民政議官を土佐郡、長岡郡、吾川郡、高岡郡、幡多郡などへ派遣し、暴動を未然に防ごうとした。民政議官の萩原菅太郎は、津山郷の越知面村で不穏な動きがあるという情報を得て、越知面村に向かった。萩原が朝方に越知面村に到着すると、小銃の音がところどころに聞こえていた。「異人が膏を取る」といううわさは越知面村でも信じられており、村の代表者たちが村内の寺院に集まっていた。彼らは萩原に会合の理由をこう語った。奥の村々の人びとが新政府の政策に反対して、藩庁に押しよせる

とっている。もしそれに同意しなければ家々を引き倒すという。隣の四万川村が明日にも越知面村に押しよせてくるらしい。

萩原は越知面村の代表者たちにたいして新政府の政策をていねいに解説し、うわさが事実ではないと説得した。村の代表者たちは、村の全部の人びとが萩原の解説を理解できるように、それを仮名で書くように萩原に要望した。萩原は一晩かけて仮名の解説書を書き上げ、翌朝早くに奥の四万川村に向かった。四万川村では戦いの準備が進められていた。萩原は証文を書いて交付し、ようやく四万川村の人びとの実力行使を止めることができた。その証文には、こう記されていた。「今度、戸籍法徴兵令頒布相成戸別調を為し徴兵令に依り、抽籤を以て、吸江病院に於て、男子の血を取り、脂を絞る等毛頭あるへき筋に無之、万一にも右等事実有之に於ては、拙者の頭を相渡し可申、仍て証文如所²⁾。

うわさが生む暴力が萩原のような人に制止される一方で、うわさが新しいうわさを生みながら暴力へ発展する場合もみられた。吾川、高岡の両郡では、横倉山での託宣という新しいうわさが、のちに膏取り一揆とよばれる暴動へ人びとを押し流している。この小文では横倉山の託宣に焦点を合わせて、膏取り一揆に接近する。

2

大正12年(1922)に清水源井は横倉山での神託について次のようにのべている³⁾。

そして之が参謀長なるものも出来てきた、名野川郷僧津村の陰陽師隅田教学といふ、頗る口巧者で相当文学の素養もある男でありました、兎角民心を収攬するには、信仰の力によらねばならぬと考へたの

で、平素郷民の信仰する横倉神社があるから、教学は之に参籠して神託を受け、大に之を宣伝したものであります、之の事は明治十六年に、土陽新聞に数日に亘って書いてありましたが、之を調べて見ると今日まで余り年月も立たず、又当時の人も多くは生きて居りました時分、殊に土地の通信によりて書いたものでありますから、誠に能く筋道が立って居り、人名なども頗る確実でした、蓋し之が事実だろうと思ひます、今其の横倉山の神託なるものを読んで見ますれば、

- 一 庄屋年寄を廃し、戸長用係を置きしは、姦吏の同類にて、異人鼯鼠のものなり。
- 一 毛唐人へ日本人を奴僕又妾に売ること、其の時は戸籍番号の順に依ること、而して姦吏間金を取る事。
- 一 以上の事を為すには、旧国主の在藩にては邪魔になる故、帰京を命じたる事。
- 一 尤も怖るべきは、醜夷の中には残忍なる国在て、人体を烈火に掛けて、其の脂を燃し取りて之を飲む事。
- 一 速に兵を起し、姦吏を誅し醜夷を追払ひ、旧藩主を帰国せしめよ、然らざれば日本は神国なり、六十余州の神明何ぞ擁護せん、軍の勝利疑ふ可からず。

以上を神託として大に宣伝したものでありますから、段々勢力も出来、遂に長十郎は用居を出で、川口に本陣を構え、幕を張り柵を造り、木製の大砲を据え、所謂竹槍蓑旗を翻して陣揃へを為し、其の上郡村に檄文を出したのであります、

清水は横倉山の託宣について明治16年(1883)の『土陽新聞』の記述に依拠している。『土陽新聞』は高知の自由民権派の機関誌だった⁴⁾。「高峯廻夜嵐」という実録小説の連載が明治16年4月23日付けの『土陽新聞』から始まった。横倉山の託宣の場面は、「高峯廻夜嵐」第13回(明治16年6月1日)に以下のように描かれている⁵⁾。(判読が不明な箇所を□で示す。)

此時教学長十郎が密謀に荷担なし共に一策を示し先づ彼の戸籍法の内最も村民の誤解せる二三ヶ條の文を書写し諸所へ□合せし農夫ともを□□に呼集めて此文を示し合せ先づ又手例の弁舌を掉つて云様は今度政府より改定なりし戸籍法及び廃藩置県等の公布は素より人民に傷害を及ぼす筈は無譯なれば其許□

百を誤解し諸方へ□会し珍事を惹出さんやの噂あるゆへ我等其改革事件につき篤と勘考を廻らす所頗ふる疑惑の□尠なからず就ては箇様の場合には靈験新たかなる神仏の御託宣を受かば其意乃正邪善惡自から判然すへしと存し付當所人民の第一信仰する横倉神社の御託宣をうかがひ申さんと自から斎戒沐浴して一七日参籠なし一心に祈念を凝したる所満願の夜となりて不思議の御示現を蒙りぬ……

「高峯廻夜嵐」によれば横倉山の託宣は、一揆の中心人物である竹本長十郎と山伏・陰陽師の隅田教覚の戦略だったことになる⁶⁾。隅田教覚がうわさに動揺する人びとに向かつてわざと政府の政策を擁護するような態度を表し、かえって人びとの疑惑をつのらせるように仕向ける。そして人びとが、うわさが事実かそうでないかと迷いはじめたとき、教覚は人びとが納得する判断基準を提示する。それが横倉山の託宣である。

教覚は斎戒沐浴して横倉神社に7日間参籠し、祈念した。しかしながら具体的な祈念の場所や方法は明らかにされていない。松田富夫の聞き書き調査によれば、教覚は横倉山での託宣の折り、「火ぶせの祈祷をし、火の上をわらじばきで歩いてみせ」て、神の加護と靈験を人びとに示したという⁷⁾。

3

前にみたように清水源井は横倉山の託宣の文言を「高峯廻夜嵐」から引用している。歴史学者の平尾道雄は膏取り一揆についての先駆的な研究で、「要旨」と「要領」ということばを補って、清水の引用と同文の託宣文を示しているが、その出典は明示していない⁸⁾。膏取り一揆に言及する文章の多くは横倉山の託宣についてのべている。しかし管見するかぎり、横倉山の託宣文の典拠が記されている研究は見あたらない。

教覚は託宣の内容を文字で書いたのだろうか。そしてその写しを配布したのだろうか。「高峯廻夜嵐」の作者はその写しを忠実に書き写したのだろうか。それとも、教覚が語った託宣のことばは、聞き伝えて人びとの口から耳へと伝わっていったのだろうか。そして「高峯廻夜嵐」の作者は口頭伝承の託宣内容を文字に起こしたのだろうか。あるいは横倉山の託宣は実際にはおこなわれなかったという可能性もある。託宣のうわさだけが広まったとも考えられるからである。

いずれにせよ横倉山の託宣が人びとを一揆に駆り立て

ていったことは確かのように思われる。「高峯廻夜嵐」は横倉山の託宣を聞いた人びとの反応を次ぎのように語っている。

今横倉山の神託を聞よりも有□撲実頑固の農民ども更らに疑ふ気色もなく神明の保護を頼み己の性命財産を全ふせんと忽ち一途に心を決し異議なく教学の懲瀆に従ひ遂に一揆を起さんと評議疾みに一決せり然るに此の神託の噂忽ち両郷中へ伝聞せしかば各村の老幼婦女は今にも外国人が買取りに来らんと思ひ違へ泣叫び悲み転ぶ其声宛ら山谷を震動する斗りなりける……

4

膏取り一揆は、明治5年(1872)1月に一揆の中心人物の逮捕により終息した。しかし、「異人が膏を取る」といううわさは、明治時代の半ばになっても人びとの想像のなかで生きていた。土佐清水市の一人の女性は次のような話を語っている⁹⁾。

異人さんの話かのうし。あれは、そうですのうし。わたしが十四の年でひたけん、繰ってみると明治二十二年になりますろう。旧正月二十一日の、お大師さんの日でひた。

遠奈呂の川の端に避病舎がありましたが、あの避病舎があった所い林区(営林署支部)がありまいてのうし。昔の人は、あんな辺鄙なとこへ林区を建て

たりしてのうし。宗呂の永瀬の山ン中にも林区を建てちゃったのうし。やっぱし、昔の人は鈍にあったもんよのうし。

遠奈呂の林区に異人さんが来るいうち、お茶を汲んちいく子がいるというのに、誰っっちゃアいく子がありませんな。異人さんが女子の子の膏を取るいうち、みんなで怖じて、誰っっちゃア行きてがありませんで、まだその時分は黒船ん来るいうち、来たら大砲で射ちまくるつもんで、春日神社の下に大砲据えちゃった時ですものうし。

注

- 1) 大野康雄『復刻五台山誌』土佐史談会、1987年。
- 2) 萩原汎愛「脂取暴動事件前後の概要」『土佐史談』3号、1918年。
- 3) 清水源井「土佐脂取り一揆騒動の■末」『土佐史談』7号、1922年。
- 4) 家永三郎・外崎光広・吉田曠二『海南新誌・土陽雑誌・土陽新聞』弘隆社、1983年。
- 5) 『土陽新聞』は高知県立図書館所蔵のマイクロフィルムによる。
- 6) 橋 弘文「無法者とその身体」小松和彦編『記憶する民俗社会』、人文書院、2000年。
- 7) 松田富夫「隅田教覚について(一)」『土佐史談』175号、1987年。
- 8) 平尾道雄『土佐農民一揆史考』高知市民図書館、1953年。
- 9) 河野 裕『聞き書・明治生まれの土佐』金港堂書店、1986年。